

# カリキュラム・マネジメントの導入期における 学校組織づくり

ー AARサイクルの活用と分散型リーダーシップ ー

学籍番号 219120

氏名 二ノ倉 直

主指導教員 田村 知子

副指導教員 佐々木 靖

## 1. 問題の所在と研究の目的

### 1.1 研究の背景

我が国では近年、不確実性が高く将来の予測が困難な社会となっている。このような時代背景の中で、学校教育における質の高い学びを実現し、これからの社会が、どんなに変化して予測困難な時代になっても、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、判断して行動し、それぞれに思い描く幸せに向かって、生涯にわたり能動的に学び続けられる力の育成を目指すことが求められている。しかしながら、実習校では以下の通り、体制が十分に整備されていなかった。

### 1.2 実習校の現状と課題

実習校の組織的な課題を整理すると、以下の2点にまとめることができる。

- ① 組織的な目標やビジョンを設定し、協働性を発揮しながら課題解決に向けた具体的な行動を起こすことができていない。
- ② 改善や改革を繰り返しながら組織の力を高めようとする組織文化が築かれにくい。組織の協働性を高めることと、カリキュラム・マネジメントに対する高い意識と具体的な変革に向けた行動を起こせるようになることが具体的な課題となる。

### 1.3 研究の目的

本実践研究の目的は、カリキュラム・マネジメント以下の2点を明らかにすることである。

- ① 協働性の高まりが省察と改善行動の発現につながっていく動的なプロセスを、分散型リーダーシップアプローチによって明らかにする。
- ② AARサイクルの考え方が応用することで、カリキュラム・マネジメントをスムーズに導入・推進していくことができるかを明らかにする。

## 2. 研究の内容と方法

### 2.1 先行研究の検討と仮説の設定

先行研究として、「学習する組織論」「省察的实践家論」「学校文化の醸成」「AARサイクルとエージェンシー」に関する研究を中心に検討を行った。本実践的研究では、「カリキュラム・マネジメントの導入期においては、AARサイクルの活用が効果的である」と仮説を設定した。

## 2.2 研究の方法

研究の目的に沿って、組織の協働性を高める実践と、カリキュラム・マネジメントの導入に向けた実践を開発し、インタビューやフィールドノーツの活用を中心とした質的データによりその効果を検証した。

## 3. 実践

### 3.1 課題の設定と解決策の策定

教員は、カリキュラム開発の必要性を理解しているが、実際にそれを行うことには消極的であることから、目標の共有化を行い、組織の方向性をしっかりと定めることと、実際に協働を行う実践力を高めることが課題であった。

この課題の解決策として、目標を共有して協働するための対話を増やすことで、教員間のつながりを強化する解決策を計画した。また、総合的な学習の時間におけるカリキュラム開発など具体的に協働する場を設定し、実践力を高めていくことを計画した。

### 3.2 課題解決に向けた実践

2021年度は、「任意参加の学習会や研修」「オンライン授業の実施」「グランドデザインの策定」「行事予定の見直し」を通して、目標を共有化し協働性を高める実践を行った。これらの実践の中で、教員間のつながりを強化していった。2022年度は、3年計画で総合的な学習の時間のカリキュラム開発を開始した。まず、カリキュラム開発を継続して行うために、取り組みの記録を残し、振り返りを行う資料を蓄積する教員一人一人がAARサイクルの考え方を応用して省察を繰り返し、その成果をKPT法(Keep-Problem-Try)というフレームワークを通して集約して、組織のPDCAサイクルを回すための原動力となるように実践を重ねた。

## 4. 考察

### 4.1 実践の成果と課題および仮説の検証

2021年度の実践では、リーダーシップ実践を広げること的成功し、教員間のつながりを強化するとともに、目標を共有し協働して新しいことにチャレンジする組織の雰囲気づくりを行うことができた。2022年度の実践は、AARサイクルを応用して教員の省察力を高め、その成果を組織的に回すPDCAサイクルに反映させる一連の流れを確立することができた。今後の課題は、さらに教師エージェンシーを発揮して、主体的にカリキュラム・マネジメントに取り組む組織文化を築き上げる取り組みを計画し実践することである。

仮説の検証については、AARサイクルの活用は、導入期の課題解決において機能することが明らかになった。

### 4.2 今後の展望

現在取り組んでいるカリキュラム開発は3年計画なので、2年後の完成に向けて現在の実践を継続する。また、カリキュラム・マネジメント導入期の課題を解決するための、汎用性と再現性の高い具体策を開発するために研究を継続する。